

## D. H. ローレンス思想と老荘思想との共鳴点に 関する一試論 — その2

田形みどり\*<sup>1</sup>

### An Examination of the Resonance between D. H. Lawrence and *Lao-tzu* and *Chuang-tzu* — Part 2

Midori TAGATA

#### Abstract

D. H. Lawrence, Lao-tzu and Chuang-tzu set their eyes on the fact that human beings are also one form of being in Nature. In the culture and society where human beings are the centre of the world, they have to reconsider established humanity and morals. The inhuman and impersonal aspects of D. H. Lawrence's literature and the heartless elements of *Lao-tzu* and *Chuang-tzu* resulted from this attitude of theirs. In the core of a man, Lawrence finally found the magnetic pole which makes his life really his own. The magnetic pole polarizes with other magnetic poles in Nature and magnetic forces flow between them. The sun, the moon and the earth are huge magnetic poles and every creature has its magnetic pole in its centre. Even a rock has its own. Lao-tzu and Chuang-tzu found Tao: the natural flow in which everything in Nature occurs, develops, changes and disappears. When they realized the existence of Tao, they understood that human beings are also the end of Tao. Infinite, abundant life-world in Nature opened to D. H. Lawrence when he caught the magnetic pole and to Lao-tzu and Chuang-tzu when they woke up to Tao.

**Keywords:** D. H. Lawrence, Lao-tzu, Chuang-tzu, magnetic pole

#### 1. 序

「まずは太陽と共に始めよ。そうすれば、あとは徐々に、徐々に、始まるであろう。」これは、D.H. ローレンス (1885～1930) が、その生涯を閉じる3ヶ月前に一気に書き上げた『アポカリプス論』(1931)の最後の文章である。フレデリック・カーターの著書『聖ヨハネの黙示録』に載せる序文を依頼され、パトモスのヨハネによる新約聖書の「黙示録」に関して書きはじめるが、ローレンスは、ここで、ローレンスの血肉の中で、沸々と煮えたぎる宇宙観、生命観、人間観を吐き出すことになった。それらは、生涯に渡って徐々に煮込まれ、その終盤を迎え確たるものになっていた。そして、吐き出されたものは、内容も量も序文の域を大きくはみ出しており、『アポカリプス論』という題名

をつけられ、一冊の書物として誕生したのであった。福田恒存は、『現代人は愛しうるか—アポカリプス論』という題名をつけ、このD.H. ローレンス著『アポカリプス論』を翻訳しているが、そのまえがきで、「人間を造りかへる力をもった書物といふものは、そうめったにあるものではないが、この『アポカリプス論』はそういふまれな書物のひとつである。すくなくとも、ぼくはこの一書によって、世界を、歴史を、人間を見る見かたを變へさせられた。」と述べている<sup>1)</sup>。

「まず太陽と共に始めよ。」と読者に向けて発せられたこのメッセージは、波うち鼓動する龍の口からハッーと吐き出された<sup>かえん</sup>火焰のようである。こういった<sup>かえん</sup>火焰は、知的に論理的に理解しようとしても理解できないものである。炎の小さな一片が、時熟してある者の腑に落ちた時、その者は<sup>かんじ</sup>莞爾とし、その血肉は炎の一片がもたらす熱い活力を吸収

する。このメッセージは、こんな風に少しずつ消化していくしかないように筆者には思える。しかしこの小論では、あえて知的に、「まず太陽からはじめよ。」というメッセージに含まれている内容を探してみたい。

## 2. D. H. ローレンス文学における非人間性 (inhumanity)・非人格性 (impersonality)

D. H. ローレンスにとって、‘書く’ということは、自分自身の模索のための活動であった。『息子と恋人』(1913)を書き終え、『虹』(1915)、『恋する女達』(1920)へと後に発展していく小説を書き始める頃から、この姿勢は顕著になってくる。ローレンスを文壇に送り出したエドワード・ガーネットに宛てたこの時期の手紙の中で、ローレンスは自分が過渡期にあることを繰り返し訴えている。1914年1月29日の手紙では、「『息子と恋人』で用いた、情緒(emotion)の光に照らし出された人物や場面を重層に積み上げ構成していく従来の手法で小説を生み出すことに、もはや喜びは感じません。」と書いている。また、1913年2月1日の手紙では、「今書いている小説は、これまで書いてきた小説とはまったく手法が異なるものです。はるかに視覚化されてません (far less visualized)。しかしそれがどんなに不評をかおうとも、それを書かなければなりませんし、又それは自分が喜びを抱いて、今書けるものです。」と書き送っている。この時期ローレンスが表現しようとしていたものは、『息子と恋人』を執筆した時の生き生きとした写実描写では、描けなかったのである。ローレンスの深奥部で、深く、ダイナミックな欲望といったらよいような流れが渦巻きはじめたのであった。ローレンス自身、それが何であるのか、はっきりと捉えられないのであるが、それは深奥部から突き上げてくる、切実な衝動であった。その衝動にうながされて模索するが、未だ像を結ばず、その描写は漠然としたものになり、その構成はエドワード・ガーネットに一貫性に欠けると評され、また、その心理描写は不自然であると評されるのであった。「内部は、多くの火が燃え立っていますが、ぼんやりとしかとらえられないもの (vague) で書くしかないのです。過渡期的なものです。」とエドワード・ガーネットに書き送っている<sup>2)</sup>。1914年6月5日にエドワード・ガーネットに送った手紙では、ローレンスの小説の中に、既に社会に公認され定着している古風な人間的要素を持つ自我を求めないでほしい、と訴えている。

現代ほど感傷的な時代はないとローレンスは洞察する。人々は、競って華々しい感情生活を送ろうとしているが、彼らが抱く感情のほとんどは観念が感傷的に捏造したいかさまであり、それに打ち興じ他をしのごうとするさまは、ゲームをしているかのようにであると述べている。精神と肉体が、自然な調和の中にあり均衡を保ちそれぞれが他を尊重する時、生命ははじめて享受できるものとなる。しか

し、今や肉体は、最もよくて精神の道具であり、最悪の時には玩具となる。今日の男・女の肉体は、それぞれ訓練された犬のようである。サーカスの犬よろしく、演技し、みせびらかし、拳句の果てに満たされぬ苛立ちの中で崩壊してゆく。肉体こそが真の飢えを、渴きを、日光や雪の中にある喜びを、バラの香を嗅ぎライラックの木を見る喜びを、真の怒りを、悲しみを、やさしさを、憎しみを、情熱を、感ずるのである。しかし、今や肉体の瑞々しい自発性は麻痺し死に瀕し、人は真の感情を抱きえないとローレンスは述べる。教育は、その始めから、何を感じずべきか、何を感じてはならないかを教え、ある一定の感情領域を教えこむ。型を記憶した精神は、型どおりの感情を抱く。これは精神によって捏造された感情であり、感傷 (sentimental feeling) であるとローレンスは言う。すべての感情は肉体に属するものであって、精神はそれを認識するだけであるとローレンスは捉える<sup>3)</sup>。「僕の偉大なる宗教は、知力よりも賢明なものとして、血と、そして肉を信ずることなのです。われわれは精神 (mind) では、間違いをおかすことがあります。がしかし、われわれの血が感じ、信じ、言うことは、常に真実なのです。」<sup>4)</sup>これは1913年1月17日に27才のローレンスがエドワード・ガーネットに宛てた手紙に書いていることである。キリスト教社会の中で生を受けたローレンスは、精神性が最高度に重視され、肉体は野蛮な卑しきものとして侮蔑、排除される社会に育った。その社会の中では神と天使、そして神性につながる人格と精神性を備えた人間を重視し、動物、植物、無機類といった自然界を下位に位置するものとして軽視あるいは侮蔑する。それはキリスト教世界観のもとに根づいたキリスト教社会の姿勢であった。人間の肉体が立脚する自然性、即ちそれは動植物と共有する部分をもつものであるが、その自然性を人格と精神性を重視するキリスト教世界では、人間を成り立たせている根幹として容認しない。精神偏重のキリスト教社会の中で、青年期のローレンスは、肉体の闇の底から発せられる正体不明の呻き声に苦しんだのである。この苦しみを経て、肉体が人間存在の土台を成していることを、ローレンスは自ら納得し、確信したのであった。聖ヨハネは『新約聖書』の中で「言葉は肉となれり。」と述べているが、ローレンスは肉体から、あらゆる言葉が出たのであり、肉体の中にこそ語られるあらゆる言葉が在るのであり、「肉体は言葉となれり」であると書いている<sup>5)</sup>。肉体を流れる血液にこそ魂の実体があり、深層意識の実体があるのだという信念は、ローレンス文学を終生支えた支柱である。肉体の深奥の闇に蠢く混沌とした生命、即ち「究極の自我」を捉えた時、それを意識化し描き出してゆくという執筆姿勢をこの時期にローレンスは確立したのであった。その結果、描き出された人物は読者が慣れ親しんでいる既存の人格をはみ出た人物であり、時として非人格的であり、また時としてその心理は非人間的になり、文芸評論家の批判の対象になった。エドワード・ガーネッ

トも、この非人格的、非人間的要素を理解できずに、1914年6月を境に、ローレンスとは疎遠になる。『虹』と『恋する女達』の草稿が書き始められた1913年から『恋する女達』が1920年に出版される頃まで、自己の内部の渦巻く闇を模索する過渡期が続いた。この時期ローレンスは、肉体の深層部の闇に「究極的自我」を探る一方で、ローレンス自身何を求めているのか明確につかめないうまま、内部から沸き上がる衝動にうながされ、非人間的 (inhuman)、非人格的 (impersonal) という言葉を灯火のように掲げ、闇の中を模索していたのであった。読者は、1913年以降執筆された作品の中で、「非人間的」「非人格的」という言葉に頻繁に出会う。これら理解しようと努めるが、消化できずに吐き出すしかないのである。しかし読者は直観的にこれらの言葉がローレンス文学の真髄につながる言葉であると感ずるのである。これらの言葉は、基本的には近代人の人間性の中に巣くう限界と病弊を打破し、新たなる人間性や生命の在り方を模索するローレンスの姿勢から生じた言葉である。

『恋する女達』において描かれている「非人間的」、「非人格的」世界は三つに大別される。一つは、近代機械文明社会における機械システムの非人間性である。二つ目は、先に述べた、肉体の無意識の暗闇にうごめく混沌とした生命が描写されている部分である。三つ目は、人類以外の自然界あるいは宇宙である。本論では、三つ目に注目する。『恋する女達』においてローレンスは動物のイメージを数多く使っている。ジェラルド、クライチ夫人、レールケの動作や表情を描写するのに、狼、アザラシ、鷲、鷹、虎、鼠、兎、コウモリといったイメージを用いている。またジェラルドとグドルーンの出会いの場面にアラビア馬、牛の群、兎を介在させている。特にアラビア馬はグドルーンを象徴していると言ってよいであろう。さらに終結部において、夕日にバラ色に染まる雪の峰々を見て、官能的な恍惚状態におちいるグドルーンを描いている。これは月光が照らす浜辺でのスクレベンスキーとの性行為の最中アーシュラが月光に恍惚となる『虹』の最後の場面と共通するものがある。動物のイメージを使ったり、作中に動物を介在させたり、夕日や月光に官能的に恍惚となる場面を描き出すローレンスの内部に、自然界あるいは宇宙へ強く引かれる内部衝動が模糊とした形で渦巻いているのが感じとれるのである。1917年7月16日、キャサリン・カーズウェルに「私は私の最も深い欲望が宇宙との純粋な真の関係を求め、かつ生 (being) における真理を求めていることを見出すのです。」と書き送っている。ローレンスの中で模糊として渦巻いていた内部衝動が、1917年頃から自然あるいは宇宙との繋がりの中で息づく人間存在であろうとする内部衝動として、具体的な像をとりはじめたのであった。

1921年6月に書きはじめられた『無意識の幻想』(1922)には、宇宙回流の中に息づく肉体の中核意識機構のダイナ

ミックな有機性とローレンス独自の宇宙論が語られている。しかしその独自性は一般社会から理解されずそこに描かれた生理学や宇宙論は奇異なたわごとと冷笑を浴びたのであった。そのはしがきで、この本はあらゆる種類の学術書、<sup>ユダヤ</sup>瑜迦、プラトン、福音者ヨハネ、ヘラクレスなど初期ギリシャ哲学者たち、フレイザー著『黄金の枝』、フロイド、フロベニウス等から多くのヒントを得てはいるが、あくまでもローレンスが直観でとらえたもので書き進めた本であり、一般読者にとっても、また一般批評家にとっても、この本はただ胸をむかつかせる分けの分らぬ饒舌のかたまりと映るであろうから、ただちに紙屑箱に捨てたほうが賢明であると述べている。残った少数の読者も、ローレンスが太陽叢 (solar plexus) にあくまでも固執すると知れば、その多くが去っていくだろうし、科学者ではないローレンスが思い描く意識中枢の有機性と宇宙論など信じようと信じまいとそれは読者の勝手であると述べている。しかし、<sup>いのち</sup>生命の真髄は、直観力によってしか捉えられない闇の領域がほとんどであり、『無意識の幻想』を読み進める読者は、ローレンスの直観力の鋭さと洞察力の的確さに目を見張るのである。太陽が燃えるガス体であると科学が分析した知識を言葉と理論を媒体にして知ったとしても、太陽と人間の繋がりは深まらない。それどころか知識を得るがゆえに、知的意識は、太陽と肉体との繋がりをさらに希薄にし、太陽を光と熱を地球に送ってくる単なる物質としか捉えなくなる。因果関係から論理的に現象を分析していく現代科学の客観性では捉えられない生命の領域があるとローレンスは言う<sup>6)</sup>この本の中では、まず人間の肉体の中にある四つの神経中枢について語られる。親の両核が融合した瞬間に誕生し、我は我なりと主張する最奥の根源意識中枢である太陽叢。非我なるいっさいの宇宙から我を識別することによって我は我なりと知る腰椎神経節。感動と喜びにあふれる渴望を抱き、我を忘れ、我の外にあるもの、我を超えたもの、我に非ざるものに向い、君は君だと知る心臓叢。心臓叢において迎入れたものを分離、放棄する意思中枢である胸部神経節。これらの四つの神経中枢が、胃の背後にある太陽叢を中心に有機的にダイナミックに働き、固有の生命活動を押し進める。これらの磁極性を有する中枢は、その内部に主体回流 (subjective circuits) を巻き起こし、外界の対象との間には、客体回流 (objective circuits) を引き起こす。それらの回流の中で、魂は、その日その日に奔出し、新しい衝動、新しい欲望、新しい目的を生み出し、生の流れが迸り出る<sup>7)</sup>。肉体を土台にし、その中から精神活動が生まれ出てくることを描き出したローレンスは、次にその独自の宇宙論を第13章で展開する。ローレンスの宇宙論の根幹は、生が、ただ生のみが宇宙の鍵であるとするところである。そして、生は、生きた個体で成り立つ。

自発的な生き生きとした魂こそが、生を躍動させる。太陽に生を与えているのは、あらゆる草、虫、獣の生きた魂

のそれぞれのダイナミックな磁力なのであって、生物のうちの個々の魂は、それぞれ太陽なる偉大な回帰極と対極しているのである。この魂 (soul) とは、人間以外の生物の中にも鎮座するという事なので、精神的な魂を示すのではない。例えば、蚊の小さな魂が、蚊をプーンと巡回させるのであろうし、尺取虫の魂が、アーチ型に体を屈伸させて小枝の上を進ませているのであろう。それは生命体の中枢にあり、その生命をその生命たらしめているものを示す。万物が枯れ死ぬと、太陽はその生気を吸い込む。その無数の振動波は、太陽へと飛んで行き、太陽のうちで再生され、再び偉大な贈物をして、生者にもどされるのである。太陽は無生物宇宙の偉大なる交換中枢 (the great sympathetic centre of our inanimate universe) である。しかし、太陽を真に支えているのは死者ではない。生きる生物の太陽叢と太陽の核心との間におけるダイナミックな連繋、つまり完全なる回流である。太陽の心核はすべての生き物の生命の心核と、すなわち人類の太陽叢とダイナミックな連繋を保ち、対極しているのである。太陽が無生物宇宙の偉大なる、燃える活力を与える極とすれば、月は冷たく、鋭く、活力を与える極である。ある意味では、意思極に対応する月は、巨大な磁力体 (an immense magnetic centre) である。月は燐やラジウムというような強烈な元素から成り立っているものであり、強力な化学作用と運動作用をもたらす元素から成り立ち、磁力を引き起し、空間を隔てて我々に作用を及ぼす。月が海の潮を引き寄せる時、それは、小さな物が大きな物に向って転がっていくというような、単純な引力ではない。月の引力にはきわめて特殊な力が潜んでいて、それが、海水から生まれる諸物質、燐、塩、石灰などに働くのである。海水が有するダイナミックなエネルギーは、淡水のものとはまるで異なるものであり、海が放つのはこのエネルギーであり、これによって海と月とは、結合される。月は塩とか燐とかラジウムといった、ダイナミックな物質の球であり、このエネルギー極は、地球と直接に陰陽関係を形成し、太陽とは反発する。太陽と月は我々の生物組織 (tissue) とダイナミックに対極しているのであって、常にこの組織に影響を与えている。月は個体の死から生まれた。時のはじまりの時、最初の生ける個体が死に、太陽と月の両極が空間に投げ出され、奇妙な混沌と闇のうちに、死せる肉体は引裂かれ、溶解され、精錬され、生者の足下で丸められ、固められ、地球が形成された。地球の中心は死せる肉体の中心である。それは死の最初の胚細胞であり、生きとし生けるものは、この中心に方向づけられる。我々の生の磁流は、我々内部の陽極的中心と、遙か足下にある地球の陰極的死中心との対極回流の中でバランスをとっているのである。最初のリアリティが生きた個体の群でなかったような宇宙、コスモスはかつて存在しなかったのだ。地球も太陽も月も、我々の死によって生まれた。しかし、これらの天体をその位置に支え、その活動を支持するのは、彼らと生ける我々との

間に存在する磁力的な、ダイナミックな連繋なのである。

ローレンスが描き出したこの生理学や宇宙論は、現代科学とは相容れぬものであろう。しかしこれは、地球上に生を受けた人間として生き、その感性で捉えたりリアリティに基づいて描き出されたのであり、その点では真実である。肉体存在である人間が、地球・太陽・月のそれぞれと対極関係にあり磁流が回流しているのだという実感は、生身のローレンスが捉えた真実である。その真実を D. H. ローレンスという文筆家は、『無意識の幻想』の中で物語られているような、生理学や宇宙論というかたちで表現したのであった。水を表わすのに、科学者は  $H_2O$  と表わすであろうが、ローレンスは冷たい流動体と表現するであろう。 $H_2O$  も冷たい流動体もどちらもリアリティである。

老荘思想では、生を生み出す土台を死と捉える<sup>8)</sup>。ローレンスも死を土台にして生は生まれると実感するのであり、また、生と死の循環は地球、太陽、月の磁気回流の中で展開しているのだと強烈に感ずるのである。その生身で捉えたりリアリティが体内を巡り、消化され、1912年『無意識の幻想』を執筆していた時期には、例えば先に挙げたような宇宙論として、ローレンスが握るペン先から流れ出たのであった。『無意識の幻想』を翻訳した小川和夫はそのあとがきで、「ローレンスの偽らぬ感受性を土台にして築かれたこれらの生理学や宇宙論は、いわば神話としての真実性を持っている。」と述べている<sup>9)</sup>。神話や象徴の中核には、底知れぬ叡智である本能と直観によって捉えられた宇宙の驚異が鼓動している。これらの驚異は、人々の情動的生命意識を覚醒し、大きなうねりを引き起す。理性によってでは、引き起しえないうねりである。『無意識の幻想』は、読者の理性にはなく直観に直接うったえてくる力を持つ書物である。読者はローレンスの直観が捉えた、生命の驚異・宇宙の驚異の中に、リアリティを生身の感性によって捉えるのである。

第一次世界大戦が勃発した1914年7月から1919年に戦争が終結するまで、ローレンスは妻フリーダがドイツ人であったためにスパイ容疑をかけられ、英国に足止めになる。終戦と同時にイタリアへ飛び立ち、以後シチリア島、ドイツ、セイロン、オーストラリア、アメリカ・ニューメキシコ州、メキシコと生涯旅をすることになる。『無意識の幻想』は1921年ドイツ・バーデン地方の黒林の中の巨大な樅樹もみぶなや樺樹びやなの根元で書かれた。樹液がゆったりと流れる胴体みに身をもたせ、太古より続く野蛮な樹々の深い沈黙に浸ると、ローレンス自身、我を忘れ、ペンからは言葉が流れ出すのであった。実際『無意識の幻想』は、「我が樹木の書」であるとローレンスは述べている。暗く湿った深い森に入ると、樹々はある荘厳な残酷さを湛え屹立している。口唇も、眼も、心臓も持たないこの巨大な個体群は暗く自足し、不屈の精力をもって逆立つ非人間的生命の林立群である。食欲に地中に根を張り、しなやかに空に枝を躍らす。この顔無き木々の深奥な無関心 (indifference)、つま

り無心に流れる生命の中に在ることをローレンスは好んだ。精神性を持たない生命体が放射する生命の流れの中でペンを走らせることが、ローレンスは好きだったのである。ローレンスは観念に蹂躪され抽象的になることを一番嫌ったし又恐れた。老荘思想においても、感性で捉えられない世界を観念的に捏造することを避ける。「言は知の知らざる所に休むは至れり。」<sup>10)</sup>これは言葉が智恵の知ることができない限界で休止するということが最もすぐれたことなのであることを表す。両者とも森羅万象の具象を捉え、その具象の土台の上に築かれた思想である。その点では両者とも、大地に根づいた思想と言える。

ローレンスは1918年12月、キャサリン・マンズフィールドに宛て、「現代で小説を書こうとするならば、人間世界の敷居を越えなければならないと私には思われるのです。」と書き送っている。ローレンス文学は、肉体の暗闇にうごめく「究極の自我」を模索することから始まった。しかし、この「究極の自我」よりももっと奥に、自分の生命を生命たらしめているものがあるという思いが、ローレンスの意識の中で模糊とした状態であったようだ。ローレンスは「非人間的」・「非人格的」という言葉を掲げてさらに奥に突き進んだのであった。そしてついに「究極の自我」からさらに人格性や人間性を削ぎ取ると、他者の生命の流れを引き寄せ、自らの生命の流れも他者に向って流れ出す磁極が現われたのであった。肉体をかかえて流れている生命、それを包む外皮をすべて取り去ってしまうと、それはとどのつまり、磁極であるということに最終的にローレンスは行き着いたのであった。生命を生命たらしめているものは、この磁極であるということこそローレンスは捉えたのであった。そしてローレンスは、この磁極を太陽 (sun) と呼んだ。他者の磁極と対極をなし、そこに生命の磁波が流れる。個の内なる太陽は、諸々の磁極と対極をなし、生命の磁波が回流する。個の中の太陽、天空の太陽、そしてその彼方の太陽の背後にある茫漠たる巨大な太陽、それらは互いに宇宙の生殖器の中で抱き合っている。そしてさらに、原子の中に太陽がある。それは原子の中の神である<sup>11)</sup>。詩集『パンジーズ』(1929)の中に「下において」という詩がある。

我々は自分がこうであると自覚する自我の下で、  
我々の本質は、異なるものである。  
我々は、ほとんどどんなものででもありうる。

草や木の下、道路や家々の下、海の下には  
岩がある。その岩の下で岩がどのような存在  
であるのかを、我々は知らない。  
地球の熱い荒々しい中心、それは  
我々の想像よりはるかに重い。

鉄よりも重く、ずっしりとした求心力で収斂した

魂の枢軸は、既存のすべてのものより重く、  
熱い。そして孤独である。  
しかし他との繋がりを紡ぎ、  
どっしりとした均衡で自転し、  
息づく星々や諸々の太陽の中心に向って、  
目に見えぬ流れとなり、息を吐く。  
地球は、その重さを太陽に傾け、太陽は太陽の  
中の太陽に傾ける。  
相互に均衡を保つ力と電磁波が行き交う。

人間の魂も、我々が信仰と呼ぶ無意識  
の傾斜で、太陽の中の太陽に傾く、原初の  
エネルギーに満ちた生命の息吹が行き交う。

その魂の中心から、はるか遠く、巨大なる中央の  
太陽に向って、そしてまた、すべての原子の中の  
太陽に向って。

この詩は1928年の年末に書かれている。1920年頃からローレンスの中で像<sup>かたち</sup>をとりはじめた、「諸々の生命は宇宙の磁力回流の中に存在しているのだ」という実感はさらに確信を深め、ローレンスは晩年を迎えることになった。

1925年7月に書かれたエッセイ「……愛はかつて坊やだった」(1925)には、D. H. ローレンスの存在論と呼ぶべき記述がある。

存在しているすべてのものには、二つの本質がある。猛烈にそれ自体を、維持しようとする求心力と、他者に向って流れていく遠心力がある。侵入してくるすべてのものを拒否し、自己を維持しようとする一方、われわれが引力と呼ぶ流れに浸り自己から他者に向って流れ出すのである。すべてのものが求心力と遠心力で渦巻く磁極である。石もそうである。かつて人々は石を崇めた。その不思議な耐久力、堅固な力、反発力、不変を維持する力ゆえに石を崇拜した。そして石に磁極の息づかいを感じた人々は、まさに磁極である男根の象徴として巨石を立てたのであった。われわれ男性と女性も石と同じである。個の強い反発力と凝集力は、個から流れ出て再び個にもどってくる不可思議な生命の流れと相対するのである。星々も太陽も同じである。自転する地球の求心力は、そのたけり狂う遠心力に対して均衡を保ち、太陽と月の間の宇宙空間に、ダイナミックな均衡で自らを保っている。

生きて流れている肉体存在であるローレンスも、強力な磁極である。生命の流れ (desire) は、陽光や火や雨のように純粋なものであるとローレンスは言う。ローレンスの生命は、例えば空、木々、牛のスーザン、エジプトのファラオの像、旧約聖書、ルビーに引き寄せられ、満たされ、新たな息吹を得る。世界をローレンスにとって生々としたものにし、合流する生命の流れの中にローレンスを留め、自然という楽園からローレンスを締め出さずにおいておく

ものは、他の磁極に向って流れ、又他の磁極の流れを引き寄せる生命の流れ (desire) であるとローレンスは語る。こうした未知から流れ来る麗しい力の到来によって、ローレンスは自己を維持できるのであるし、自己たりえるのであった。未知から来たる不思議な流れを敬虔に受け入れよとローレンスは言う。それは人の意志によって生み出せるものではない。

自由と権利を主張する近代自我は、自己の生命を自分で律し、独力で運命を切り開き、未知から来たる力を受け入れない。他の諸々の磁極から到来する流れを感知することもせず、独立独歩、機械的意志によって自己の目的達成に邁進する。こうした近代的自我を「現代の奴隷 (modern slave)」とローレンスは呼んでいる<sup>12)</sup>。

自然界および宇宙の諸々の磁極は対極をなし、そこに磁波が流れる。時空は、無数の対極関係を抱き、滔々と流れていく。その流れの中で、ひとつの磁極であるローレンスも、諸々のものと対極をなし、磁波が行きかい、時空の中を流れてゆく。それこそがローレンスにとって生命の成就であった。「非人間的」・「非人格的」という言葉をたずさえて模索した結果、ローレンスがたどり着いたところは、磁極であった。キリスト教・個人主義・合理主義を土台にして構築されたヨーロッパ近代社会に生を受けたローレンスが、磁極にたどり着くのは、至難な業であった。東洋には、「無我」なる境地があるが、その境地を持たず、又、人格や精神性で身を堅固に鎧い、個人の自由と権利を主張してやまない、人間至上主義のヨーロッパ社会の中で、ひとつの磁極になるためには、人格とか、人間性というものを、人間存在から、意識的にかつ執拗に取り除いてみる必要があった。「宇宙の一塵」たることを希求したローレンスは、いったん、人間世界の敷居を越えなければならなかったのであり、人間存在から、人格や精神性を削り取ることによって、その中核にある磁極を捉えた。そこにたどり着くことによって、ローレンスは、宇宙回流の中で息づく一生命体たる糸口をつかんだのであった。

### 3. 老荘思想における非情

道家研究家・福永光司は、「老子の批判は、主として儒家の価値体系と文明主義を相手として意識したものであったが、それはまた自然を無視する一切の学問文化に対する不敵な挑戦であったとも解することができる。」と述べている<sup>13)</sup>。D. H. ローレンスも、キリスト教を基盤にした文化社会における人導主義と自然を卑下する文化姿勢に戦いを挑んだ作家であった。両者は、人間も自然界に存在する一存在形式であるということ直視したのであり、そのことを忘れ社会存在であることに埋没している文化社会に、警鐘を鳴らしたのであった。老荘思想では、人間だけを神と連続的につながる理性的な人格として恩寵づけることをしないし、又、鳥獣草木を人間に食われて然るべく地に満

てる<sup>おのの</sup>儼く存在として手段化することもない<sup>14)</sup>。D. H. ローレンスにも、同じ姿勢があるということは、本論において、これまで述べてきたことである。両者とも、人類の根柢なき思い上がり、人類それ自身を破滅させる生命の落とし穴であることを警告している。

儒家の人間像が国家権力や支配階級にとって期待される人間像でありえるのに対して、老荘のそれは国家権力に奉仕せず、支配階級に利益をもたらず、いわゆる文明の進歩に寄与せず、文化の向上に力とならない。しかし老荘の人間は、はじめに国家や道德規範があったのではなく、はじめに人間の生があったことを知っており、いわゆる文明や文化が人間の生を価値づけるのではなく逆に人間の生が文明や文化を価値づけることを知っているのである<sup>15)</sup>。ローレンスにとっても、文明や文化は、そこに息づく生命的意識によって測られるものであったし、「最初のリアリティが生きた個体の群でなかったような宇宙、コスモスはかつて存在しなかった。」という言葉から察せられるように、ローレンスにとって、生がすべての視点の要であった。老子は都市的な奢侈や享楽の生活またその中にある危険で狂った官能の病的耽溺、頭でっかちで下半身のミイラ化した都市の知識人の青ざめた反自然の生活といった、文明文化の見かけだけの華やかさを批判し、脚で大地を踏みしめて立つ村落自然の強靱で安定した生活への復帰を説いた<sup>16)</sup>。

「大道廢れて仁義有り。」<sup>17)</sup> 福永光司は「『道』とは、自生自化する一切万象の生滅変化の流れそのものにほかならない。」と述べている<sup>18)</sup>。又、道家研究家・森三樹三郎は、「『道』とは、自然ということに尽きる。」と述べている<sup>19)</sup>。自然とは自ずと然りと流れる宇宙の流れである。この「大道」とは、森羅万象を生滅し、自ずと然りと流れる流れである。この「道」に無為に身をまかせることが廢れてしまった社会においては、仁・義という人徳が必要となり、また、智慧が出て作為を行うがゆえに偽が生じ、また、六親が和することがない社会であるからこそ、孝・慈という人徳が必要となり、国家が昏乱するがゆえに忠臣が必要となるのであると『老子』には述べられている。これは儒家の有為なる道德規範の不自然さを批判するものである。無心に「道」に従えば、仁・義も自ずと生じ、馥郁たる智慧も生じ、六親和し、自ずと孝・慈が行なわれ、忠臣が集う国家となると道家は説く。道家は、自ずと然りと流れ万物を生成消滅する「道」に全幅の信頼を寄せる。「心を淡に遊ばしめ、気を漠に合わせ物の自然に順いで、私を容るる無ければ、而ち天下治まらん。」<sup>20)</sup> 無為にして、すべての物の自然に従うようにすれば、天下は自然に治まるであろうという道家の姿勢・無為自然は、自然界に展開されている造化のみごときに圧倒され、その着実な流れに絶対の信頼を寄せるところに成立する。老荘思想の「道」は、人間が立てた道德規範をはるかに超えた、森羅万象を生成化育する流れである。「『道』の常は、無為にして、而も為さざるは無し。侯王、若し能く之を守れば、万

物、將に自ずから化せんとす。」<sup>21)</sup> 自ずと然りと流れる流れは、無為にして、万象を生滅変化させ、為さないということがない。老荘思想の「道」への信頼は、自ずと然りと流れる流れを満幅の信頼をもって信ずることにつながる。

福永光司は、「莊子は、一切の人間的なものの否定のなかに真に人間的なものを追及した。」と述べている<sup>22)</sup>。『莊子』雜篇では、君主の民への博愛、正義を行い戦争をやめる平和主義、仁義を実行する人導主義が戒められる。愛と憎しみとは表裏一体であり、民を愛することは民を害する手始めになる。また正義を行ない戦争をやめるというのが、自分の正義を信じることは、対立を絶えず念頭におくので戦争を起こすもとなる。美德というのは、表裏一体となっている美醜の一方を取り上げることであり、必然的に醜悪を招きよせることになる。仁義を実行するつもりでも、おそらくそれは偽善となってしまう。儒家の人為によって立てられた道德規範に潜む人為の矛盾を莊子はこのように突く。

D. H. ローレンスも、「王冠」(1925)の中で、和をもって尊しとする人導主義や平和主義を、観念が先導する分裂行為 (activity of disintegration) であると述べている。それらは生命の成就を人にもたらしはしないとローレンスは思うのである。獲物をとらえて貪り食う欲望 (desire) をその肉体に秘めているライオンが小羊と仲良く寝ころんだりしたら、これは虚無 (nothingness, nihil) を生み出す。また、ライオンがラズベリーを食べながら川辺を歩き、その空しさを嘆くなどということがもしあるならば、このような状態ではライオンは獲物をとらえ貪り食う時の肉体の貴重な没我 (precious self-oblivion) を得られないのである。この没我こそ、生命が充足する貴重な一瞬なのである。観念的精神に照らされ、自意識が常に目覚めている現代人は、没我になりえないのであり、又、逆に没我になりえないがゆえに、現代人は常に自意識に苛まれるのである。生命の根源的な欲望に根ざした対立や格闘が、和をもって尊しとする観念的人導主義によってなだめられてしまうと、その生命は根源的なところで去勢されてしまうことになる<sup>23)</sup>。人類以外の動物は、自意識を持たない。没我のひとときをむさぼりながら、無心に流れていく。その生命の充足に比べると、観念的な人導主義や平和主義は、自意識を煽り、ダイナミックな自発中枢を萎縮させ、空虚を生み出す。ローレンスは、ここに、人間の生命の青白い怯えを感じるのである。

『老子』に「天地は不仁、萬物を以て芻狗と為す。」とある<sup>24)</sup>。芻狗は藁で作った犬であり、祭礼の飾りとして使われるが、終われば無用として捨てられる飾りである。つまり上文は「天地は情けを知らず、万物を芻狗のように扱う。」ということを表わす。老子の「道」は、一切の人間的な有情を厳しく遮断する天地大自然の無情な在り方、大自然の理法の冷酷無残な非情性において語られている。福

永光司は、「老子の「道」は餓死者の屍の上を颯々として吹き過ぎてゆく野辺の風、逃げまどう戦場の民の頭上に悠々として流れる白雲のように、ただ無為であり自然であり、無感動であり無関心である。」と語っている<sup>25)</sup>。無表情に見える白雲は、人間の視線が捉えた様相であり、「道」はすべてを包みこみ無限の造化を成しつつ、ひたすら流れてゆく。そして、「道」は無為にして為さざるは無しである。森羅万象は、自ずと然りと淡々と流れる流れの中で輝き、色を放ち、香を漂わせ、動き、音を発し、振動し、生滅を繰り返す。老子の哲学の根本にあるものは、天地自然の造化のいとなみに対する歎慕と憧憬であった<sup>26)</sup>。

老荘思想は、天地の自然から人間的な有情を遮断するところに特徴をもつ。それは、天地の自然に人間的な有情を移入し、それを人為的に規範化しようとする儒家の作為を否定するものであった<sup>27)</sup>。D. H. ローレンスも、ウィリアム・ワーズワースが自然界に人格の神性を認め、その純粋さ、無垢、甘美さ、崇高さを賛美する時、それを擬人化であると批判している。ワーズワースが桜草に近づき「われもまた堤に咲く黄色き桜草なり」と語るのは、僭越であり、一輪の桜草は自然界の中で流れている一個の生命体であるとローレンスは言う。桜草は空や風に向かって花開き、人々や蜜蜂や甲虫が訪れる。開花は一種の生命の交流の場である。桜草はその肉体を抱えてそれ自身である。ローレンスは、桜草を自然界の中で流れている一つの生命体として、あくまでも非人格的存在として捉える。桜草を人格の神性に引きずり込むワーズワースの汎神論と、ローレンスはここにおいて明確に一線を画するのである<sup>28)</sup>。

老荘思想は、人格的な神のかわりに非人格的な「道」を立て、人間的な愛や智のかわりに一切の人間的なものを遮断する非情な無為自然を説く<sup>29)</sup>。D. H. ローレンスも老荘思想も人格神ではなく、目前に展開している自然界のいとなみそれ自体に、より大きな信頼と敬慕を寄せており、ここにおいて両者は深く共鳴するのである。

キリスト教社会の中で生まれ育ったローレンスがキリスト教的な人格をその中央に常に保持していたことは当然であり、キャサリン・カーズウェルに宛てた手紙の中でも、「私は人々がより少なくよりも、より多くキリスト教的であることを欲します。」と書いている。しかし、ローレンス自身が述べているように、キリスト教はローレンスにとって不十分であった<sup>30)</sup>。精神を偏重し、自然界と肉体を侮蔑するキリスト教の姿勢にローレンスは反旗を翻さざるをえなかったのである。

「人は地に法り、地は天に法り、天は道に法り、道は自然に法る。」<sup>31)</sup> 「道」とは、自生自化する一切の万象の生滅変化の流れそのものであり、生物は「道」から生じた有形であるというところでは、すべてが等しい。人間も鳥獣もさらには草木虫魚も、自ずと然りと流れる自然界の流れから生じたというところでは等しい。老荘はこれらを差別することがない。老荘思想ではこれを万物斉同と呼ぶ。

D. H. ローレンスは、「究極の自我」からさらに人格性、人間性を削り落とすことによって、生命を生命たらしめている磁極を据えた。ローレンスは、これを太陽と呼んでいる。肉体存在であるひとりの人間はひとつの磁極であり、他の諸々の生命体のひとつひとつの磁極とある瞬間、対極関係をなし、磁波が流れる。例えば、タンポポは生物学的な存在形式としては、人間よりもずっと下等である。しかし、一輪のタンポポが、春のやさしい陽光を受け生命の炎が燃え上がり、大地に張った根を土台にして緑の茎と葉を伸ばし生きた宇宙の全体系との結びつきの中で黄色の花びらを開く時、一輪のタンポポは他と比較できない唯一無二の存在となる。ローレンスはこの時、タンポポは四次元の存在になるのだと言う。四次元と表現しているが、それは三次元空間の実存そのものである。タンポポは種や類としては、人間に踏まれ、牛に食べられ、蟻によって蝕まれ、征服される種である。しかし、「生きて在る (being)」という実存としての一輪のタンポポは、生命が滞ることなく流れる肉体存在であり、他の磁極を魅了する一つの磁極である<sup>32)</sup>。ローレンスには生きている個は絶対的存在であると思えるのである。「宇宙には絶対の原理などないと私には思われるのです。いっさいのものは相対的だと考えられます。しかし、私にはまた、各々の生物はそれ自体絶対である、その固有の存在において絶対である、この感じは抵抗できぬほど強烈に感じられるのです。」とローレンスは述べている<sup>33)</sup>。ローレンスは生きている個の中で瞬間を刻々と流れる流れ自体に絶対的存在を感じるのである。老荘の表現を用いれば造化のひとつひとつに実存を感じるのである。そして、生きている個は唯一無二の絶対的存在であるとローレンスは据える。ローレンスにとって生きて在るということは、プラトン流の、観念的なことでもないし、また精神的なことでもない。個有の生命が、流れる肉体存在として他の生物や太陽や月といった諸々の磁極とのダイナミックな連繋を通してその生命の流れを流れることである。ローレンスは、自らひとつの磁極存在であるところに降り立つことによって、無限に豊かな生命宇宙が開けたのであった。逆に表現すれば、無心に生命が流れるタンポポと同じように、自然界の中のひとつの生命になりきるためには、ひとつの磁極にローレンスはならなければならないのであったのである。

荘子に「天地も我と並に<sup>とも</sup>生<sup>なが</sup>らえて、万物も我と一つたり。」とある<sup>34)</sup>。悠久なる天地も一瞬の我が生命とともにあり、限りなき万物の多様もわが存在と一つであるということを表す。万物が自生自化する悠久の流れである「道」は、私という個でもある。また、今という瞬間の私でもある。老荘思想は「道」を絶対的実在と捉える。ゆえに、道の末端である私という個、そして、私という個の生命の流れである今という瞬間に実存を捉えるのである。福永光司は「個」が直截的に「普遍」と結びつくところに老子の思考の根本的な特徴が見られる。」と述べている<sup>35)</sup>。「普遍」と

は、万象を生成消滅する「道」の普遍性である。老荘思想は、森羅万象に実存を捉えるのであり、言い換えれば「道」の末端の流れに実存を捉えることである。天地自然の造化のいとなみには、人間が抱くような目的意識はない。雲はただ漂うべくして大空を無心に漂い、水はただ流れるべくして地上を無心に流れていく。野を駆ける獣は、人間に食われるためにこの世に生まれてきたのではなく、地に蠢く虫は、この世を価値ありとみて生まれているわけではない。彼らはただ生まれてきたから生きているだけであり、死が訪れればただ死んでいくだけである。天地大自然のいとなみは、ただあるがままであり、ただ自ずからにしてそうである。しかもそこでは万象は一瞬といえども停止せず、刻々新しい様相が展開され、絶えず創造的な神秘がくりひろげられてゆく<sup>36)</sup>。

老荘思想も D. H. ローレンスも、天地大自然の流れに実存を捉え、その末端の造化の個々の命の流れに実存を捉えた。両者はここで根本的に共鳴するのである。

ローレンスもエッセイ「女性は変わるか？」(1929)の中で、老荘思想と同様に、一輪の雛菊には、その生命が目指す目的地などはないと語っている。近代合理主義社会では、すべてに目的を課す。生命にも、物にも、行為にもすべて目的を設定する。その社会では、雛菊は人々に美しい花を楽しませるために存在している生命ということになる。しかしローレンスは、雛菊はひたすらその生命の流れを流れているだけであって、雛菊が目指す生命の目的地などないと述べている。重要なことは目的ではなくて、流れているということであり、目的という概念をすべてのものに引きずり込むことは、すべての本質を破壊することであるとローレンスは語る。野の雛菊のように、肉体を抱え自然回流の中でひたすらながれるということに終始できず、生きる目的を掲げなければ生きられない近代合理主義社会の生き方に、ローレンスは生命の怯み<sup>ひる</sup>を感じるのである。ローレンスも老荘思想も、肉体存在として流れている今という瞬間を実存の極地として大切にす。生命を曲線を描いて流れる流れと捉えることは、流れの末に必然的に訪れる死を抱くことである。死を抱いてみると、肉体存在として生きて在る今という瞬間が貴重な瞬間として際立つ。ローレンスはこの瞬間を赤裸々な瞬間 (naked moment) と呼んでいる。目的達成を目指す合理主義社会においては、「今を生きる」ということは、刹那主義として批評されることになるが……。

人間の生命そのもの、生きて在る裸の人間の姿を捉えるのに老荘思想もローレンスも、人類が人知人欲の限りを尽くして築き上げた文明の巨構を、その価値体系や観念体系をも含めて、すべて一度瓦礫の山として見つめる必要があった<sup>37)</sup>。

「万物も我と一つたり。」とは、現象世界に即してみれば、柳は緑で花は紅く、一切存在は千差万別の種々相を展開していて、自己の存在は、その万物の中のあるかなきか



の小さな一つであるが、「道」という絶対世界に即して考えてれば、万物の多も自己の一と同じであるというのである<sup>38)</sup>。老荘思想の「道」は不立文字の世界であるが、それはしばしば「玄」・「無」・「一」という漢字で象徴される。「一」は「道」の万物斉同の世界を象徴するとともに、そこから生ずる上記の実相をも象徴しているのである。

「道」においては、すべてが相対的である。即ち、森羅万象のすべてが相対的である。毛嬙や麗姫は、人間がこれを絶世の美女だとするが、魚はその姿を見ると恐れて水中深くに沈み、鳥はその姿を見ると驚いて空高く飛び去り、鹿の群はその姿を見て一目散に逃げ出すだろう。同様に、是非善悪の価値も人間に対してだけ存在するものであり、その意味で相対的なものである。人間価値の差別はたちまち消失し、そこには美醜もなく善悪もない絶対世界が現れる。これが万物斉同の境地である。すべて等しいとし、すべてをそのまま肯定する万物斉同の立場からすれば、是非善悪や美醜、可不可、大小、長短など一切の対立が消失するが、生と死の対立も例外ではない。万象を自ずと然りと流れる流れと捉えると、生も死も流れのひとつであり、「道」にあっては等しい重さでバランスをとるのである<sup>39)</sup>。「道」においては、秋の動物の毛の先端ほど大きいものはなく、常識が大きなものの極致とする巨大な泰山（山東省にある名山）ほど小さなものはないということもありうるのである<sup>40)</sup>。冬に備えて密生する秋の動物の毛も「道」の流れであり、そのように捉えれば、そこには「道」の無限の大きさがある。また巨大な泰山も宇宙の大きさと比べればなきに等しい。「道」という生きたる渾沌の中では、すべてが相対的であり、対立が消失し、「一」に帰するのである。老荘思想は「道」のこのような広大無辺さ、根源的な「一」に憧憬するのであり、「道」のカーオスに己の心を渾沌化させるのである<sup>41)</sup>。

「万物尽く然りとして、是を以て相蘊む。」<sup>42)</sup> 万象をあるがままによしとし、温かい是認の心でこれを包む、ここに老荘思想の真骨頂がある。一切存在の対立と矛盾の相をその対立と矛盾のまま然りとして肯定し、「道」と一つになった境地に万物を包摂する<sup>43)</sup>。生きたる渾沌の中で与えられた自己の現在を自己の現在として逍遙する。美もまたよし、醜もまたよく、現実もまたよく、胡蝶であることもまたよい。あらゆる境遇を自己に与えられた境遇として遅しく肯定してゆくところに、老荘思想の自由に逍遙する人間の生活がある<sup>44)</sup>。それは理想主義をも人為として蹴散らし、天地自然の流れの中で生を授かった一生命体として、丸裸で立つ人間の遅しさである。「道」とは鶏が鶏として鳴き、犬が犬として吠え、人間が人間として生きていることそれ自体である<sup>45)</sup>。

#### 4. 宇宙的人格

新約聖書の「ヨハネ黙示録」は、現実世界の腐敗墮落を

侮蔑憎悪し、救世主の再臨を待ち望み、神の栄光を歌っている。ローレンスは、そこに使われている象徴に、計らずも古代異教徒の宇宙が息づいていることを『アポカリプス論』において示し、古代異教徒が、宇宙との生きた繋がりの中で生きていたことを表している。

ローレンスは、古代人にとって自然現象が神になることを次のように述べている。古代人の意識の在り方は、ことごとく何かが起こるのを目の当たりに見なければ治まらなかったのであり、万物がことごとく具象であり、世に抽象物など存在しなかった。しかも森羅万象かならずなにごとかをを行うのである。古代の意識にとっては、素材 (matter)、物質 (material)、いわゆる実体あるもの (substantial things) は、すべて神であった。大きな岩は神なのである。動くものは二重の意味において神となる。人はその神聖さを、存在するものとして、また動くものとして二重に知覚するのである。すべては物体 (a thing) であり、影響を与える。宇宙は存在し運動し相互に影響し合うものの複雑な一大活動である。そしてこれら全体が古代人にとって、とりもなおさず神なのである。ある瞬間何か心が打ったとすると、それが神となる。夕方地上から立ち上る水蒸気が人の創造力を捉える時、水蒸気は神となる。あるいは水を前にして渴きが抑えられない時、渴きそれ自体が神なのである。その水に喉を潤し、甘美ななんとも言えない快感に喉が癒されるなら、今度はそれが神となる。また水の冷たさに突然触れた時、別の神が即ち“冷たさ”がそこに現れるのである。これは単なる質ではなく蔵存する実体である。これらの神々は、感覚主義を廃して主知主義を押し進めるソクラテスが出現する時代に至って死滅してしまったとローレンスは述べている<sup>46)</sup>。

ローレンスは「ヨハネ黙示録」の中に出てくる龍 (dragon) について次のように述べている。「ヨハネ黙示録」の中で龍は大悪魔を表わすのであるが、古代にあっては、宇宙や人間に流れる生命の形象であった。龍は、流動的、電撃的、戦慄的な動きを表わす象徴である。宇宙の激動する流れやその戦慄を内に秘めた静寂を表わす形象である。また龍は、人間のうちに潜み、究極的には自らなんとも手の下しえない生命の力を表わす形象であった。常には穏やかに眠っているが、不意に躍り上がる生命の流れである。突発的な激怒、情熱的な人間の内に潜む燃えるがごとく激しい憤り、熾烈な欲念、放恣な性の欲情、激しい飢渴、あるいは欲も得もなく眠りこけたいという衝動等に至るまで荒れ狂う生命の流れを表わす形象である。人間の全身全霊を貫いて波打つ流動的、電撃的で、しかも克服しがたく、透視力すら持つ潜在力、これが龍である。そしてまた、龍がのたうち荒れまわる世界は、星辰きらめく広大な宇宙である<sup>47)</sup>。「ヨハネ黙示録」の中で、龍は悪魔という悪の人格として使われてしまっているが、龍は星辰きらめく宇宙に生身で生きていた古代人が宇宙の回流や自己の中に流れる生命の流れに懾き生み出した形象であるとローレンスは言

う。人間は過去において形象によってものを考えた。古代人にとって思想とは、感情的知覚が完成した状態であり、たえず情動がそれ自身累積し深化するものであって、やがてそこに一つの充実感が生まれた。思想の完成とは、渦巻きのような深淵、情動的知覚の奥深くへ、測鉛を垂れることであった<sup>48)</sup>。

宗教的でありながらしかも神を持っていなかった古代の世界では、人間がいまだ相互に緊密な肉体的連帯感のうちに生き古代の部族連帯意識を持っていた。部族は宇宙といはば胸と胸を触れ合わせ、裸のまま宇宙と抱擁しあっていた。宇宙全体は生き生きと脈打ち、人間の肉体と繋がっていた。両者の間には、神という観念が介在する余地はなかったのであるとローレンスは述べる<sup>49)</sup>。古代においては、宇宙それ自体が聖なるものであり、万物の始原であり、時を絶して存在しているのであった。それゆえ宇宙を創造する人格神は必要なかったのである<sup>50)</sup>。

現代人が孤独であるのは、その人間性に問題があるのではなく、彼らが宇宙を喪失してしまったからであるとローレンスは述べる<sup>51)</sup>。現代にあっては、すべてが個人的でありまた人格的である。風景や大空、こうしたものまでが個人的、人格的生活の甘ったるい背景となっている。しかし古代人にとっては、風景とか個人的背景というものはさほど重要ではなかった。彼らにとって宇宙は真に切実な存在だったのであり、宇宙と共に生きることが、個的自我よりも偉大であることを知っていた<sup>52)</sup>。

ローレンスは肉体存在として在る今という瞬間に実在を捉えるのであり、「人間にとって大いなる驚異は生きているということであり、花や獣や鳥と同様、人間にとって至高の誇りは、最も生き生きしていることである。」と述べている。人間は生きて肉のうちにあり、また鼓動する宇宙の一部である。太陽の一部であり、大地の一部であり、血は海の一部である。人類の一部であり、国家の一部でありそして家族の一部である。これらとの有機的な結合の中に生を生きることこそがローレンスにとって生きる充足であった<sup>53)</sup>。

『アポカリプス論』の最後で「まず太陽と共に始めよ。」というメッセージをローレンスは読者に向けて放っている。それは日光浴礼賛者のように日光を浴びるということではない。太陽は燃えさかる大いなる意識を有し、人間は燃えさかる小さな意識を有する。もちろんこの意識は精神的な意識ではなく、肉体の中枢の闇から発し、直接他者の肉体の中枢部に伝わる磁波というようなものである。人間が自分の内から個人的思想感情の渣滓を拭い去り赤裸々な太陽的自我の底深くまで降りて行くなれば、その時太陽と人間は刻々と燃えさかる焰のうちに互いの受胎を交わすのである。その時太陽は人間に生命を、太陽的生命を与え、人間は逆に輝かしい血の世界からささやかな新しい輝きを送り返すのである。怒れる龍のごとき偉大なる太陽は、人間の内なる神経的、個人的意識 (nervous and personal

consciousness) を憎悪する。現代の日光浴礼賛者はこのことをよく理解しなければならないとローレンスは言う。なぜなら彼らの皮膚を青銅のごとく鍛える太陽こそ、彼らを崩壊に導くものであるからである<sup>54)</sup>。

「まず太陽と共に始めよ。」ということは、宇宙回流の中で他との関係を紡ぎながら流れるひとつの肉体存在になることであり、即ちひとつの磁極になりきることであろう。老荘的に表現すれば、「道」の流れの中でひとつの造化としての流れになりきることであろう。

D. H. ローレンスを“性の解放者”と呼ぶのは不適切である。実際ローレンスは、一夫一婦の結びつきを永遠に守り結婚生活は四季のリズムの中に営まれるべきだとするカトリック教会の結婚観を支持している<sup>55)</sup>。むしろ、ローレンスは“人間が肉体存在である”ということのとてつみなさを世に訴えた作家でなかったかと筆者は思う。それは、母親の子宮の中で生命が芽生え、子宮の中で生命体の進化の歴史をたどって生まれ出た人間ひとりひとりが抱え持つ肉体存在であることのとてつみなさである。その肉体は宇宙回流の中で自然界の一部として進化してきたのであった。ローレンス自身は、進化論など信じないと語っているのであるが……<sup>56)</sup>。

人間を自然界に存在する一存在形式として見つめることを欲した老荘思想と D. H. ローレンスは、人間性に関する既成の概念を見直す必要があった。両者の中にある非人間的要素や非人格的要素は、このことから生じたものである。宇宙的な人格という新たな人間性を両者は模索したのであった。D. H. ローレンスは磁極を捉えることによって、そして老荘思想は「道」に目覚めることによって、彼らの前には無限に豊かな生命の宝庫が開現したのであった。

福田恒存は『現代人は愛しうるか—アポカリプス論』のはしがきで、「人間は太陽系の一部であり、カオスから飛び散って出現したものとして太陽や地球の一部であり、胴体は大地とおなじ断片であり、血は海水と交流する。はたしてこのような考え方は神がかりであろうか。が、ぼくはローレンスの結論にいかなる批判を興へようとはおもはぬ。それは『アポカリプス論』の読者の責任であろう。」と述べている。

## 謝 辞

本稿の査読を通して、貴重な助言をくださった査読者に深く感謝いたします。

## 註

- 1) D. H. ローレンス、福田恒存訳 (1970): 『現代人は愛しうるか—アポカリプス論』、筑摩書房、p.17
- 2) D. H. Lawrence, Aldous Huxley ed. (1932): *The Letters of D. H. Lawrence*, Heinemann, p.178
- 3) D. H. Lawrence (1967): *A Propos of Lady Chatterley's*

- Lover, Penguin Books, pp.92-5
- 4) *ibid.* 2), p.94
  - 5) *ibid.* 2) pp.95-6
  - 6) D. H. Lawrence (1969): *Psychoanalysis and the Unconscious and Fantasia of the Unconscious*, The Viking Press, p.54
  - 7) *ibid.* 6), pp.74-80, pp.162-3
  - 8) 田形みどり(2005): 「D. H. ローレンス思想と老荘思想との共鳴点に関する一試論 — その1」, 『海—自然と文化』, 東海大学紀要海洋学部 第2巻第3号 参照
  - 9) D. H. ローレンス, 小川和夫訳 (1968): 『無意識の幻想』, 南雲堂, p.280
  - 10) 森三樹三郎 (2001): 『荘子II』, 中央公論社, pp.216-7, pp.266-8
  - 11) D. H. Lawrence, ed. by Vivian de Sola Pinto and Warren Roberts, (1973): *The Complete Poems of D. H. Lawrence*, The Viking Press, p.513
  - 12) D. H. Lawrence, ed. By Warren Roberts and Harry T. Moore, (1978): ‘…Love Was Once A Little Boy’, *Phoenix II*, p.457
  - 13) 福永光司 (1968): 『老子』, 新訂中国古典選第6巻, 朝日新聞社, pp.10-1
  - 14) *ibid.* 13), p.35
  - 15) *ibid.* 13), p.90
  - 16) *ibid.* 13), p.66
  - 17) *ibid.* 13), pp.105-13
  - 18) 福永光司 (1987): 『荘子 内篇』, 中国古典選第12巻, 朝日文庫, p.133
  - 19) *ibid.* 10), pp.120-2
  - 20) 森三樹三郎 (2001): 『荘子I』, 中央公論社, p.191
  - 21) *ibid.* 13), p.207
  - 22) *ibid.* 18), p.44
  - 23) *ibid.* 12), ‘Reflections on the Death of a Porcupine’, “The Crown”, p.366
  - 24) 楠山春樹 (2002): 『「老子」を読む』, PHP 研究所, pp. 84-5
  - 25) *ibid.* 13), pp.34-5
  - 26) *ibid.* 13), p.213
  - 27) *ibid.* 13), p.396
  - 28) *ibid.* 12), pp.447-9
  - 29) *ibid.* 13), p.48
  - 30) *ibid.* 2), p.360
  - 31) *ibid.* 13), pp.143-54
  - 32) *ibid.* 23), pp.468-72
  - 33) ① *ibid.* 6), p.209  
② *ibid.* 9), p.247
  - 34) *ibid.* 18), pp.99-103
  - 35) *ibid.* 13), p.8
  - 36) *ibid.* 13), p.211
  - 37) *ibid.* 13), pp.112-3
  - 38) *ibid.* 18), pp.100-1
  - 39) *ibid.* 20), pp.59-68
  - 40) *ibid.* 18), pp.99-100
  - 41) *ibid.* 13), pp.274-5
  - 42) *ibid.* 20), pp.63-5
  - 43) *ibid.* 18), p.121
  - 44) *ibid.* 18), pp.136-7
  - 45) 福永光司 (2003): 『荘子・古代中国の実存主義』, 中央公論新社, p.131
  - 46) ① D. H. Lawrence (1973): *Apocalypse*, The Viking Press, pp.83-5  
② *ibid.* 1), pp.91-4
  - 47) ① *ibid.* 46), pp.142-9  
② *ibid.* 1), pp.140-5
  - 48) ① *ibid.* 46), pp.142-9  
② *ibid.* 1), pp.140-5
  - 49) ① *ibid.* 46), pp.159-60  
② *ibid.* 1), pp.154-5
  - 50) ① *ibid.* 46), p.165  
② *ibid.* 1), pp.138-9
  - 51) ① *ibid.* 46), p.47  
② *ibid.* 1), p.60
  - 52) ① *ibid.* 46), p.41  
② *ibid.* 1), p.55
  - 53) ① *ibid.* 46), pp.198-200  
② *ibid.* 1), pp.186-8
  - 54) ① *ibid.* 46), pp.42-3  
② *ibid.* 1), pp.56-7
  - 55) *ibid.* 3), pp.107-17
  - 56) Aldous Huxley, 瀬尾裕, 矢島剛訳注, (1958): *Aldous Huxley-2*, 南雲堂, p.64

## 参考文献

- 打木城太郎 (1979): 『死んだ男と』, 栗田企画, 総頁数196  
及川郁郎 (2000): 『ナチュラリストの読んだ荘子』, 近代文芸社, 総頁数132  
小川環樹 (2003): 『老子』, 中央公論新社, 総頁数187  
加島祥造 (2003): 『タオにつながる』, 朝日新聞社, 総頁数187  
金谷 治 (2001): 『老子』, 講談社学術文庫, 総頁数283  
金谷 治 (1998): 『荘子』第一冊, 第二冊, 第三冊, 第四冊, 岩波文庫, 総頁数236, 283, 334, 246  
楠山春樹 (2004): 『老子入門』, 講談社学術文庫, 総頁数273  
楠山春樹 (2002): 『「老子」を読む』, PHP 文庫, 総頁数281  
張鐘元, 上野浩道 訳 (1998): 『老子の思想』, 講談社, 総頁数341  
福永光司 (1976): 『荘子』(外篇) 中, 朝日新聞社, 総頁数254  
福永光司 (1993): 『荘子』(雑篇) 上・下, 朝日新聞社, 総頁数304, 262  
ポブラウスキー・ポール, 木村公一・倉田雅美・宮瀬順子編集・訳(2002): 『D. H. ローレンス事典』, 鷹書房弓プレス, 総頁数758  
森三樹三郎 (1990): 『「無」の思想』, 講談社現代新書, 総頁数216  
森三樹三郎 (1995): 『老子・荘子』, 講談社学術文庫, 総頁数455

- ローレンス・D. H., 羽矢謙一編集・訳 (1971): 『愛と生の倫理』, 総頁数161
- ローレンス・D. H., 福田恒有編集・訳(1956): 『性・文学・検閲』, 総頁数222
- Sagar Keith (1979): *D. H. Lawrence: A calendar of his works*, Manchester University Press, 294 pages
- Lawrence D. H., Mara Kalnins ed. (1980): *Apocalypse and the Writings on Revelation*, Cambridge University Press, 249 pages
- Lawrence D. H., Edward D. McDonald ed. (1978): *Phoenix*, Penguin Books, 852pages
- Lawrence D. H., Michel Herbert ed. (1988): *Reflection on the Death of a Porcupine and Other Essays*, Cambridge University Press, 492 pages
- Lawrence D. H., Simonetta de Fillippis ed. (1992): *Sketches of Etruscan Places and Other Italian Essays*, Cambridge University Press, 387 pages
- Lawrence D. H., Vivian de Sola Pinto and F. Warren Roberts eds. (1971): *The Complete Poems*, The Viking Press, 1078 pages
- Lawrence D. H., (1990): *The Rainbow*, Cambridge University Press, 600pages
- Lawrence D. H., (1990): *Women in Love*, Cambridge University Press, 450pages

## 要 旨

D. H. ローレンスも老荘思想も人間が自然界の中の一存在形式であることを見据えたのであった。人間中心の文化社会にあって、彼らは既成の人間性や道徳規範を見直す必要があった。D. H. ローレンス文学における非人間的、非人格的要素そして老荘思想における非情という要素は、ここから生じているのである。D. H. ローレンスはひとりの人間の中核に、その人間をその人間たらしめている磁極を捉えた。その磁極は自然界の他の諸々の磁極と対極をなし磁波が流れる。太陽、月そして地球は巨大な磁極であり、すべての生物はその中心に磁極を抱いている。岩にも磁極がある。老荘思想は、自生自化する森羅万象の生滅変化する流れである「道」を捉えた。「道」に目覚めることにより、人間も「道」の末端の造化であることを悟った。D. H. ローレンスは磁極を捉えることによって、そして老荘思想は「道」に目覚めることによって、彼らの前には無限に豊かな生命の宝庫が開現したのであった。

キーワード：D. H. ローレンス，老子，莊子，磁極